

メッセージ～教育学部のチャペルから 1

4 月 20 日

皆さん、春学期の授業期間が始まりました。まずは、猛威を振るう感染症に苦しむ方々への癒しと、世界中の人々に安らぎがありますよう、お祈りいたします。

今年度はこれまでにない異例のスケジュールで、生活のリズムがつかみづらいかもしれませんが、大学生としての貴重な日々ですので、この状況のなかにあっても、どうぞ健康が支えられ、豊かな歩みが守られますように。

さて、関西学院大学では、学生の皆さん全員がキリスト教学を必ず履修されると同時に、各学部にはチャペルが置かれています。聖和キャンパスで学ばれる教育学部の皆さんは、メアリー・イザベラ・ランバスチャペルとダッドレーメモリアルチャペルという二つの場で、チャペルアワーを持つ機会があります。ただ、現在は対面での活動が困難ですので、本来ならばチャペルで皆さんにお届けするメッセージを、このようにウェブを通して発信することとなりました。

本大学でのチャペルは、関西学院の建学の精神の根底にある、聖書やキリスト教が提示するスピリットに、いろんな形で触れることを目的としています。これは、様々な人や物事との出会いをとおしてもたらされます。ですので、チャペルで共有されるのは、見えるものをとおして、見えないものとの出会いに気付いていくプロセスと言えるかもしれません。ただ、いましばらくは、このように文字をとおして、皆さんにメッセージをお伝えしようと思います。

今日は、先ほど少し触れた「出会い」について、少し振り返ってみましょう。皆さんは生まれてからこれまでに、いったいどれほどの出会いを重ねてきたでしょうか。もちろん、家族やたくさんの友だち、先輩や後輩、名前も知らない通りすがりの人、記憶の奥にかすかに確認できる人。数えると、たくさんの方がわたしたちの周りにいて、言葉を交わしたり、笑いあったり、時には衝突し合いながら、自分の歴史が紡がれ、こうして今の自分があります。わたしたちがお互いに会うのは、長い人生のなかの小さな接点です。けれども、その小さな接点を通して、わたしたちは喜び、驚き、感謝し、また、苦しみや悲しみを感じます。そのいろんな気持ちが、実はわたしたちをゆっくりと形作っています。ですから、今の自分が生きているということは、そこに、たくさんの出会いが生きているということであり、たくさんの人とのつながりがある、ということです。

そしてもちろん、これは人だけではなく、動物、虫、花、樹、空の色、風の匂い、声や音、それらがわたしたちの歩みに鮮やかな色を付け、支えてくれています。

聖和キャンパスは、たくさんの木々が茂り、花が咲き、鳥が鳴き、虫が歩き、子供が散歩し、多くの学生たちの「おはよう」「こんにちは」と挨拶する声が響くところです。図書館では真剣に本を読んだり、パソコンでレポートを書いたり、リブラで楽しそうに話し合いながら課題に取り組む姿は、大学生として限りある日々大切な歩みなのだと思わされます。「時間割キツキツやー！」「課題多すぎー！」と聞こえてくる声も、それを一緒に共有する友達への、喜びと誇りの混じった、日常のコミュニケーションのように思えます。四季折々にどんどんと姿を変えるキャンパスは、いま、しだれ桜が晴着を脱ぎ、つつじの鮮やかさが際立つ季節を迎えようとしています。キャンパスに立ち入れない今の時期ですが、皆さんに少し様子が伝わったでしょうか。

ここは、自然の、人間を超える力の豊かさを感じる不思議な場所です。キャンパスの代わりに自宅で過ごしておられる皆さんのそばにも、神様がいてくださいますように。今年度、この新しい春から、また一緒に学んでいきましょう。

(教育学部宗教主事 梶原 直美)

聖書のことば：コリントの信徒への手紙二 4章 18節

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。」

